３．創造農村ワークショップ in 丹波篠山市

開催日：令和 4(2022)年 3 月 11 日（金）、12 日（土）
開催方法：現地　ユニトピアささやま レイクホール
　　オンライン開催（ZOOM ウェビナー）
主催：丹波篠山市
共催：文化庁、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）
参加者数：現地 21 名、オンライン 28 名（創造農村ワークショップ）

【3 月 11 日（金）創造農村ワークショップ】
テーマ：日本遺産のまち・創造農村の役割とは

特別講演「これからの創造農村とは」
／文化庁文化創造アナリスト 学校法人稲置学園理事　佐々木 雅幸 氏

【概要】
日本政府が呼び掛けている Society5.0（ソサエティ 5.0）は、狩猟社会、農耕社会、産業社会、情報社会と変化してきたが、次のフェーズは創造社会である。テクノロジーから見ればスマートシティ、人間側から見ればクリエイティブシティ、つまり、人間の顔をしたスマートシティがクリエイティブシティである。これからの時代は創造性というキーワードで人々が活動し、そういう地域が発展する。特に農村には豊かな自然があり、創造的な暮らしや農業、工芸などの様々な仕事の豊かさを、魅力として発信するべきであり、今は工業経済社会から創造経済社会への大きな転換点だと説明された。

- ユネスコ創造都市ネットワーク（以下、UCCN）の加盟都市は世界に 295 都市、日本には 10 都市あり、丹波篠山市も加盟している。ユネスコは第 2 次世界大戦後に国際平和などのために生まれたものであり、丹波篠山市長がロシア総領事に文化の力による平和について話に行かれたことは素晴らしい。UCCN では芸術文化から SDGs の実現に貢献することをミッションとしており、創造都市ネットワーク日本（以下、CCNJ）も SDGs の実現に向けた活動を行うことになった。
- クリエイティブツーリズムを提唱しているアメリカのサンタフェという都市を、丹波篠山市はお手本にしている。歴史的な芸術文化の多様性を持ち、ツーリストと市民が創造的な体験を共有している。これからの創造農村のひとつの軸にしてほしい。
- イタリアのボローニャでは、工芸職人が行う仕事や作品もオペラと呼び、金沢市では新しい工芸作家や未来の工芸を生み出している。両者に共通しているのは、オペラ的な働き方や工芸的なものづくりであり、これがソサエティ 5.0 の基調になる。
- 創造農村ワークショップを始めた際、当時の文化庁長官が、21 世紀の社会を切り開くのは地方分権と芸術文化であり、これを結び付けるものが CCNJ で、中でも小規模な自治体が頑張ることの重要性について述べられた。人づくりが上手くいってこそ、創造農村を持続的に発展させることができる。

- 宮沢賢治が「農民芸術概論」という本を書いたが、農村での芸術文化の価値を人づくり、地域づくりに活かすことを、これからの流れにしていきたい。

基調講演「日本遺産に認定された丹波篠山市の事例を基に」
／公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所 顧問　丁野 朗氏

【概要】
　ここ数年で文化観光推進の流れができ、文化資源の活用と保全の対立的な考え方から、一体的な投資や循環的な捉え方に変化してきた。日本遺産は文化財の裏側にある地域の文化を物語で説明して海外にも伝えることが主題であり、地域を創造するプレーヤーの育成や行政計画等、環境整備の重要性を説明された。

- 6 年間で 104 件を日本遺産に認定した。丹波篠山市のデカンショ節と六古窯は、重要伝統的建造物群を軸にした物語が多い中では個性的な日本遺産だ。また、日本遺産としてのブランドを担保するため、総括評価や先進モデルの構築、取消入替制度を導入した。多くの遺産の評価の中では、自立自走に向けた取り組みの推進が望まれている。
- 日本遺産物語を活かすためには、訪問者に物語を伝える仕組みとしての環境整備が大変重要である。また、中長期的な視点も重要で、組織整備や戦略、人材育成には時間がかかる。まちづくりには 30 年かかると思ってほしい。今年の観光甲子園では、丹波篠山鳳鳴高校が日本遺産部門のグランプリを取っており、本当に素晴らしい。このような活動が非常に重要だ。情報発信については様々な方法があるが、海軍の鎮守府 4 都市の観光ガイドは毎年交流会を行い、互いの説明ができるほど関係が深まっている。
- 日本遺産と地域ブランディングについては、いくつか事例を紹介する。十日町は 2 つの日本遺産を持っており、ジオパーク的な捉え方をしている。信濃川と河岸段丘、豪雪地帯で形成した里山の生活文化をひとつの物語としており、文化観光推進法ができたと同時に地域計画を策定して、新しい博物館をフィールドミュージアムの 1 拠点のようにつくった。益田市は「中世日本の傑作益田を味わう」というテーマで日本遺産の認定を受けており、中世のまま残っている町割を活かし、中世の「食」の再現など様々な「中世の〇〇」を創造するなど、「益田観光みらい塾」の塾生と一緒に、中世を味わうための起承転結の物語をつくっているところだ。
- 丹波篠山市には日本遺産の物語を活かして、創造農村として新しい地域の生業、産業を生み出すことを期待したい。地域を創造するプレーヤーが必要であり、人を育てることについて後ほどディスカッションしたい。観光商品は比較的短期間でできるが、しっかりした行政や地域の方針や組織がなければ、地域の受け皿をつくるのは難しい。

パネルディスカッション
／MASSE 丹波篠山 事務局長　井本 季伸 氏
　クラフトヴィレッジ製作委員会 代表　加古 勝己 氏
　丹波立杭陶磁器協同組合 理事長　市野 達也 氏
　公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所 顧問　丁野 朗 氏
＜モデレーター＞
　元日本遺産プロデューサー、株式会社ブルームコンセプト代表取締役　小山 龍介 氏

【各団体の活動内容について】

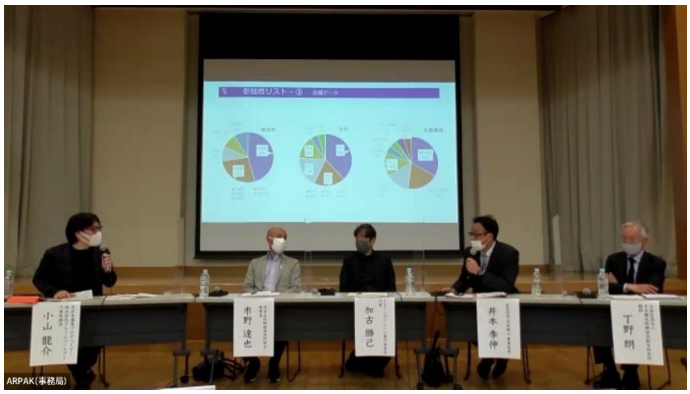
- 市野氏は約 60 軒の窯元を中心に丹波焼の産地を盛り上げる活動をされており、通販サイト「丹波のイロドリ」での売上の拡大、日本六古窯が日本遺産に認定されたこと、ターゲットを 40 代の女性に絞ったこと、景観条例の制定や登り窯の修復などの効果による観光客の増加について話された。また今後については、窯元に長期宿泊して焼成まで体験するツアーの提供やインバウンドの誘客、六古窯産地との交流などを進めたいとのお話をいただいた。
- 加古氏からは、ご自身が移住者であり、近年、工芸家の移住者が増加してきたため、交流の場として「丹波篠山クラフトヴィレッジ」と名付けて活動を始められ、昨年はクラフトマーケットやオープンファクトリーのイベントを開催されたこと、今年は作ることに触れるワークショップ形式でのイベントを企画されていることについて話された。また、移住者が新しい工芸文化を丹波篠山に根付かせ、「工芸のある空間演出」ができればと考えられているとのお話をいただいた。
- 井本氏からは、MASSE 丹波篠山が様々な団体から構成される任意団体で、観光送客から移住まで総合的な窓口となっていることや、「里山暮らし 5 日間～人とつながる旅」というツアーを企画し、体験型観光コンテンツや市民との交流、里山暮らしを体験できる宿泊施設などを用意し、将来的な移住候補者との接点としても役立てようとされているとの話を伺った。今後も年数回実施して採算ベースに乗せ、移住者や関係人口の増加につなげたいとのお話をいただいた。

【域内連携の重要性】

- モデレーターの小山氏から、丹波篠山では生業がとても魅力的な文化資源になっているのではないかという質問があり、丁野氏からは燕三条の事例として、いわゆるオープンファクトリーから始め、年数を重ねる中で町全体の祭典になり、まちづくりにつながっているとのお話があった。また、マスから個別の時代に変わると、地域の様々な事業者の協力がなければ、魅力的な観光商品はできなくなるとの意見があった。
- 域内連携については、同じ目標に向かって別々に努力していた 6 団体が、協力して目指すことに賛同した（井本氏）、情報共有とその提供でファンの拡大をサポートするような、自由参加の緩いシステムにしている（加古氏）、丹波焼の組合はひとつだけであり、産地を守ろうという地元愛で強くまとまっている（市野氏）との回答があった。
- キーマンについては、移住者の場合もあれば、地域の有力なリーダーの場合もあり、地域の社会構造にもよる（丁野氏）との意見が出された。

【今後の展望】

- 今後の展望については、今あるまだ皆が経験していないことを組み合わせたコンテンツをつくり、移住者の増加につなげたい（井本氏）、多くの工芸家が住む地域であることを発信し、他産業との新しいパズルをつくっていきたい（加古氏）、丹波焼の産地が残っていくために、他産業とつながり可能性を広げたい（市野氏）との回答があった。
- 質疑応答で行政の役割についての質問があったが、丁野氏からはしっかり計画を作成し、文化資源を持っている民間を支える仕組みも重要との意見があった。



総括

／文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事　佐々木 雅幸 氏

- 丹波篠山市はこの十数年間で着実に進化し、現在は次のフェーズの入口にあり、伝統の焼き物の産地の中で全く新しい動きが出てきた。この町の人々が工芸を大切にしており、そこに移住者が集まってきている。これは行政の応援で、文化遺産から文化資本に変わってきたことを意味している。
- 「クリエイティブ暮らし」は新しいというよりは、むしろゆったりとした日常の暮らしの体験であり、どれだけ質の高い体験や経験を準備できるかが重要である。また経済価値だけでなく、移住者を増やすためには里山暮らしツアーは強力な武器になる。現在はテストマーケティングを行って結果が出てきており、行政はここに集中投資すべきだ。
- CCNJ では、UCCN との連携を深める国際ネットワーク部会と、丹波篠山市がリードして創造農村部会を立ち上げる。グローバルとローカル、この両輪で閉塞状況にある日本をクリエイティブに変えてほしいと願っている。

【3 月 12 日（土)】エクスカーション

日本六古窯の一つにも数えられる丹波焼の郷と、「里山暮らし 4 泊 5 日ツアー」の一部を体験するツアーを実施した。訪問したのは下記の通りである。

・加古工房

陶芸家の加古勝巳氏より、加古工房及び丹波篠山での陶芸活動について話を伺った。また、クラフトヴィレッジ代表として行ってきた、丹波篠山市で活躍する陶芸家とその使い手の交流を生む仕掛けづくりについても説明された。

・泊まれる学校 おくも村

閉校を活用した宿泊施設「泊まれる学校 おくも村」で、おくもの魅力を伝える交流地点としての取組について、在所スタッフから説明を受けた。施設内には、談話室、レンタルスペース、シェアオフィスなどもあり、地域と都市をつなぐ場としての機能を持っている。

・福住地区見学 自転車工房 ハイライダー

福住地区にある自転車ショップ兼自転車工房では、福住の田園風景を堪能するサイクリングツアーを通じて、自転車のある暮らしを案内している。

・MAGNUM COFFEE

福住の伝統的建造物群保存地区にある、昭和初期に建造された芝居小屋を改装し、丹波篠山の自然豊かな四季を感じながら楽しめるコーヒーを提供している。

・丹波篠山デカンショ節

日本遺産のストーリーにもなっている丹波篠山デカンショ節には、篠山の魅力を唄いついでいる。デカンショ節保存会のメンバーに福住地区の唄を披露いただいた。

・丹波立杭焼市野伝市窯

陶芸家の市野達也氏のガイドで、伝統工芸品である丹波立杭焼の振興と丹波篠山市観光の拠点である「丹波伝統工芸公園 立杭陶の郷」を見学した。また、植木鉢に特化した窯元である丹波立杭市野伝市窯について話を伺った。